



特別
~5
6272
2





あまのあま

上之下

寶珍文庫

渡邊千秋藏

渡邊 千秋 精観

横山家藏

丁十

社
 社
 山
 山
 山

社
 社
 山
 山
 山

社
 社
 山
 山
 山

社
 社
 山
 山
 山

社
 社
 山
 山
 山

山 後 とさして又山 むすまのかけ ささく
杉と替へて又 又へ 一他清

山城のどいぬ ささく てハ 多に
よ 二 白 嫌 也 は 直

ささく 又 香 羽 え へ 一 他 清

山 形 一 片 ら を 眺 見 物 新 の 西
ささく の こ と 一 は

物 新 物 さ と さ く て 新 の 志 つ く と 牛 め の

山 乃 久 賢 の 久 さ と 子 植 物 二 白
嫌 也 は あ ゆ う と は 書 お お お

久 さ と ハ 賢 山 子 植 物 二 白 嫌 賢 山
の い ろ 片 く 体 さ め ハ い ろ り の 世 賢 山 子
む も 子 也 然 也 植 物 二 白 さ り

山 形 久 さ と 子 植 物 二 白 嫌 う と を ま
糸 ま と と ハ 多 川 ハ か や う 形

る そ 幕 の 好 士 ハ あ 任 と こ た へ ら れ は ち
か え ぬ や う し ま こ え た る 也 養 う わ る 也
さ さ く し て よ う く ん 候 也 な り の 也

山 形 錦 ハ あ 任 と 嫌 へ 一

やと

よるおと嫌おあおとやとり
いさゝるあふし

屋

よあまやるとの取おと嫌へし屋の字
四りおあふ屋

茨丸屋

あまのやまむらやも
あふ屋

矢

よとりのやおと嫌や

閑

よとりのあふ屋へし

強

よとりのあふ屋へし

あ

よし

よとりのあふ屋へし

あ

よし

よとりのあふ屋へし

う

よとりのあふ屋へし

あ

よとりのあふ屋へし

お合はるる

お合はるる

お

お

おは子目二の嫌や此体の形式

老成のまゝと申すおね乃世にまゝと申す
お子目せし野道も人さずおつるまゝと申す
らさげのの様のるハおあうこさたてハ此
興しおねと申すおの今里のおあうこ

お二

おめをうんと思ふうと申すお二の嫌や

お

おは子目二の嫌や此体の形式

お

おは子目二の嫌や此体の形式

おは子目二の嫌や此体の形式

お

おは子目二の嫌や此体の形式

やほ合さる物い首すは燗とは摩き六松風
のふらぬるいこゝとそいふあり又春風
とさるちしんの雨のふらぬあり然にほ
合さるおやむの波おこえも一ふくもほほ
二句五句燗爰別よく一いふらるあ

松風の時る

冬の暮もともほおる
降物は二句燗へし

又式説る一あつ風の雨も大らるハ降る物
よあつゆきともほほおのおおれよめりとも
里終ハ二句五句おれこゝもやうも一燗へ

むニ
六

好士うらうらふよよこへきり

松の燗日竹の暮もあは燗はほほ
おおれとあつあへし緑合有

燗まのふもあつあへしははめきり
七句五句をこゝもあつあへし

春乃春は日松のふらぬるもあつあへし
同体二句五句あつあへし

松の燗はくくはあつあへし
おこはななるよ

一いふらるあつあへし

意

とくともまむる事へし

必難

お一霧のよかま又まへし元い

眉のお

降物にあしきよあす
すまはあ及理りさるわ

次へ載し

お

お男の字いと嫌や
成類何とも人ほ

お

待意

待とま字のくふ中こそあ
つていとたのむ又ハとたん

お
お
お

又

お

お

お

お

お

かゝるに へん へん へん へん

あし 韻のまに二を中村と嫌ふハ二白
きや他嫌ふ

け

しる 百韻子に二をへん

ふ 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

二二

ふ 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

い 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

あ 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

え 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

お 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

か 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

こ 今不嫌 昨日の目赤ハ二白を嫌
けさるとも不嫌

よきまけらーいさるーもこの種
まおけー_{きつまーきとちび}
のまにまきまきまき

下知そ宿の

まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき

ふ

古寺に新度

まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき

皇居乃古卿

まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまき

古に 子みやこ嫌ひやうのるうあつても
 部只あつとのるうくハ向もび可嫌と云院
 多志うハともおぢえ様さうと云ハ向一も
 ちんご一 ちんご一 ちんご一 ちんご一
 古に 上二也様のちんごさうて久らと只
 古に 寺やあてさうのちの字形は嫌
 也は類にくるはんごさうてさうて

古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路
 古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路
 古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路
 古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路

ふれあひのちんごさうて久らと只
 古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路
 古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路
 古に 子みやこ嫌ひは向体不若うハは家路

婦とよめ

おろやあやうとてつゝハ社

船

海路とよこ船ハ藤やそハ休向体

船

大田各北藤にくまほろ何くあすて
中船つる大船あ一船とよと舟けす舟皆
船一あし

宇治船一み

さしの舟ハ北藤
め載て東江の舟

りり船やけかにくまほろとつんや宇治
舟の子孫と信ずるぬ舟申人乃くびく

不審なる舟はあしりり入来たぬり
又こりり入はち

船とむ

こきて又とよと船とあ

船

舟は代はる悪し又船のおては船のさ

船

目換執る事とのの指するのあしあ
きくたは波路ゆくさとしあこく

船

舟山と船一とと嫌天
の舟あさしハああしりハあ

くしを毎三まやのさるち

富土々燐凌るの燐ちん

よひて意ろ一さるち

林属りんじゆ りん本初と可燐みれこのと市人
る一ぬ氏度去也は初すくとまらる

ち又ゆるとソつめ終にぬ氏るぬさる

と燐りん 六一散原一まるとありぬ一はま
と替て又ありへるるや同るやと

是式初の初るちまらぬかして安用とありハ

二散散のかる散衣ると初ぬあつぬ女代
二也散原ハ氏るち又散ハ原也

牡丹ぼたん 只一也そかハ原のまらるる
とりりるちみ原るるとも

近代用換はひろ一をぬる

草くさ あらふさるの生の字初は燐

冬ふゆ とりりるちみ原るるとも

人あわ石燐

おす一筆さすの類又あまは此儀も
とまり終へ又不あまは終

筆 只一筆

ぬい

人ほさく一筆あはしり
人ほさく又奥より

ほ

るぬきぬ

きと筋乃字
あし振の字

るにぬきぬ

こ

い月

新教也此ぬき月
は七白さや
い月輪のさや
向る秋の月

あまは又さく月
あまは

らの園

向むく

らの友

人ほさく一筆
あまは

心形松 植物ノ一ニ白燻カウ志よく此
子成り又重なることあり

心形松 植物ノ不燻待の字形に也心の
松の植物ニ白燻と云ふと云

心十ヶ条ノ葉有るもの松の字は
此の同字を也心松の字は
植物ニ白燻と云ふこと

心乃花 植物ノ一ニ白燻也
新式に白燻ハ松ノ植物ノ

心乃花

心乃花 植物ノ一ニ白燻也
あつた松ともあのを

心乃花 植物ノ一ニ白燻也
あつた松ともあのを

心乃花

心乃花 植物ノ一ニ白燻也
あつた松ともあのを

心乃花 植物ノ一ニ白燻也
あつた松ともあのを

心乃花 植物ノ一ニ白燻也
あつた松ともあのを

木葉衣

神農さるしの時に木の葉と綴て衣よこするよつて種物

衣類 木葉のよは種とあるよは種と形なり

ハ木葉衣梅戸巾のよは種ものよは種の

書おハきいしよよこし

夕衣の衣

考子 衣類

ふあし衣の字はせむさや

木葉の雨

此は種物木葉の雨は種物

は儀昔難夢師祝今失念す必るお好士よの
君後又の人と此ころう巾とあふくきや
と書る換はりけり今教りて久とるころ
如木葉の雨ハあるいせころう体さるハ
此は種物と被の事畢むおほ種物也
木葉散 冬山後葉を同さるや
興や終てころんれと
く種物ころんれと
木玉 木之字玉字考も也白の種

二季乃戸

其の庵古極地ある
みんを

若延

うんまむやあまにむあまを
ささきういあまを

新藤

うー中の字不嫌おみまぶ
まあし

越政

ま名にこの嫌をうーおあま
へまあまの三むをこおあま

ちしち

うーこのあまこつあま
まあ越政まあまあま

くまにちま

意乃心

あむ体あまにうーあ
ハ名に不問あ意のつあ

たま

あま

まうあま意乃たかくる
あまにうーあまあま

あま

こい乃世

新教本懐おの世は
あまにうーあまあま

あま

あまにうーあまあま

いもぢな草 いもぢな草の式

まといはな草 まといはな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

洞子林 洞子林の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

いもぢな草 いもぢな草の式

ふんぎん

うづらむらさき

不付よー一儀あめとん

うつらよとらひて

魚のまやめ

橋をみせ

とんて

つーつと

名の考

雁の声

考ひく

音羽

い

胡蝶

ふのま

〜

とま

~~~~~

ハ

千



い

只一名に于一とみのは又一一あふ

江

さしみの類さし

え

り

るとりや初百韻に六一さる他  
隆々々

て

寺

ち一々に于一又一一一

寺に庭

さとしてをみに于一まうり  
終ておけり一居おのるも同捨

ち寺と云ぬま一一の

寺におけ

る種見くおのるまうの  
る別一まうしよの通目

共也

寺の字

おのる一はくたさへ一

ふ

ふたよと二むの種神ハまよふの種



手よ事統

ことごとく類をひの嫌

てよよはきお合なふ

あ付そ

とにこーおてあーのまーあ  
よのまや新合の字付るを嫌

新合我て

あおてとてまとい不嫌  
あち

あといまおまのしやに句嫌也てあ百韻  
にまへしやけえ初あ大田各のぬこ

下の句我てるあ

チのま  
あ

あといまおまのしやに句嫌也てあ百韻

回下乃る我ていあ

あといまおまのしやに句嫌也てあ百韻

あ

天船の操船

北のまのま生船向るを  
の本記し。難見とのあ



「明倫彙編」とあり

「何」  
「舟」  
又「舟」を「船」とも書く

又「天」は「舟」とも書く  
「舟」は「船」とも書く  
「舟」は「船」とも書く

「舟」は「船」とも書く

「天」  
「舟」  
「舟」は「船」とも書く

「舟」  
「舟」は「船」とも書く

「舟」  
「舟」は「船」とも書く

「舟」は「船」とも書く

「舟」  
「舟」は「船」とも書く

「舟」  
「舟」は「船」とも書く

「舟」は「船」とも書く

「舟」  
「舟」は「船」とも書く



粟津の原

明又

山

お取

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

淡路

東路

あつ

明

あ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あけ

あ



あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけ

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の

あけの字は、二の嫌ぬの字の  
あけの字は、二の嫌ぬの字の







不謂夕月の日あり

朝の字

四やおよ一はくやあした一  
けさよ一はよひさるちあき

けさの朝のうしろ一あき一

朝の附目

ゆふけくひさると六朝日ゆふ  
日や月子不嫌は朝つくひ

さうこの思さといりく月よ並句さる事

あき

朝の字

たつ時より朝のさる

朝

朝の字新あき朝る不産まといり  
おハ不嫌といりハ朝とさる事

朝嫌へ一の用此儀也

あはれり

あはた乃かたろ一とあ  
さるはあき一はあき

朝の字新あき朝る不産まといり

あ

朝の字新あき朝る不産まといり

朝の字

朝の字新あき朝る不産まといり  
朝の字新あき朝る不産まといり



〜〜〜他後〜

# 青丹志

〜〜〜始〜

り

〜〜〜又芦田鶴茶鴨さしめ  
馬子一三三山馬何と杉成替り也

# 葦千屋茶太ふ

ほり〜出れ冬  
く〜打さる〜

下蔵さ〜し〜は詞と〜ハ〜ハ〜  
茶子二白燻也〜あ〜屋葦大り〜ハ地  
〜名にの〜や〜おの〜

# 茶田鶴

種物〜さ〜茶子不燻〜  
〜山茶田鶴さ〜あ〜ハ

種物〜さ〜茶子二白燻也

# 葦千鴨

種物子不燻ハ〜あ〜や〜く〜ハ  
〜あ〜鴨さ〜

〜ハ種物子二白燻也田鶴同〜

# 高蒲子枕

〜何と〜水魚也

# 遠茶子

君〜り〜二白也遠茶と牛ハ  
〜遠生おの



其の字新く

あけらふの

あけらふの

みにと植物との

秋風

二也秋の風との

あけのう

秋乃田

田ハ

あけのう

あけのう

あけのう

あけのう

秋の

あけのう

秋の

あけのう

あけのう

秋の

あけのう

あけのう











へし魚ぬあみさるはあ而可嬌ああのおみ  
又七重のあそさるは佛説ふ七重羅網  
のさしるわいあけさるは二白さるるんし

あみ 子 編の口一さるるへし

ほのしくま

嬌 へしあへし  
繩 さるるへし

くさるるあそさるはあそさるる指合さる

温 あへし へし地さ申不謂たへ温も春也

あつる あつる 涼しき嬌やあへしへし  
あつる 涼しき嬌やあへしへし

扇さるる

あつる 涼しき嬌やあへしへし  
あつる 涼しき嬌やあへしへし

あ あ ぬへしへしあへしへし

あ あ ぬへしへしあへしへし

あ ぬへしへしあへしへし  
あ ぬへしへしあへしへし

ハ首柏の今あそさるはあそさるる指合さる  
あへしへしあへしへしあへしへし



しほ

しほのあはれ

あはれ

あはれのあはれ

あはれ

あはれ

あはれのあはれ

あはれ

あはれのあはれ

あはれのあはれ

あはれのあはれ

あはれ

あはれのあはれ

あはれ

あはれのあはれ

あはれ

あはれ

あはれのあはれ

あはれ

あはれのあはれ



里神系

此みに葉中一に不りのおく  
らハ皆里々々々トソク

桜乃宮風のみな

さると此々に  
他津え何と

伊勢と事社さり

中保娘

此神祇古田娘の事持ひめさ  
との乳何とひめ一を二也

中保ひめえ衣

此衣書きえり  
と載之にり

今案子ゆはしはりけ儀の用さる

中保娘歌田娘亦

成へしと

今案子ゆはしはりけ儀の用さる

中人

うたひものや持物る二の婦者也  
此人婦人の字やは論字也

桜

一又いやくはさ桜山さくらさる  
一又いやくはさ桜山さくらさる

桜と二あかてとさるはと  
桜二あかてとさるはと  
さくら二の由さるへし二本さるる







三つあるは五白燗へ一竹すは三白燗と  
 あり又ある説はゆくハ 夕す一五白燗と  
 あり夫のゆありと暮りせくおゆはハを  
 三燗等の類す一は三燗へ一はあ  
 竹すは五白燗と一説はあ燗と  
 のすくお燗の字と燗と  
 三燗を三燗と三燗を三燗と

燗 只一燗にす一

燗 只一燗にす一

燗 只一燗にす一

燗 只一燗にす一

燗 只一燗にす一



ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ

ホカニクハナシ







月まは二白なまふくまり

五月雨

六一梅の雨一むめ乃あめ  
おききさしりりしりりりり

むらさきのひのあそび

五月

子白嫌あ月の字まの  
子白嫌あ

休む

福やなまのゆは二白嫌あ

目おけむは

かか

雛子あ

雛あ一まなまあのあなあ

休む

ああのあのあのあ

なまあ

なまあのあのあ

休む

なまあ

あ

ああのあのあのあ

ああのあのあのあ



さしきき  
ふふ  
さ  
は  
春は  
さしきき  
ふふ  
さ  
は

春は  
さしきき  
ふふ  
さ  
は

さしきき  
ふふ  
さ  
は

さしきき

さしきき  
ふふ  
さ  
は

さしきき  
ふふ  
さ  
は

さしきき







ら華乃花

嬉し市よさうといふはくお  
まのまや枝およ二句嫌や

と華

きけ替てこまへしと云脱りくと  
うらわーころんー

さく花園

ふらふら

霧芝海

うすまの海を乃海何も水  
ふらふら

霧花丛

みはる二句や垣よるよと  
嫌み離子垣に初とあ嫌

霧

と一とて又霧のひのしと  
まへー他

霧

は身おまは句論嫌さわ乃花おまは  
打越とるさ

霧乃花

霧まもまうもま子嫌  
番花煙と云脱り

霧

霧

一をよーたるへー又衣うりさるあ  
へまのほあう流とつあてを秋くあ

霧

霧











夕乃字

初子一はくさるゆふく二  
四上六ゆ夕おうくにゆふく

二二二二二

夕

子差教る字も歳に字も老の字も  
しつとまも二白嫌や己あまもほ

夕々々

此女にゆふくは  
肥後と國とまりゆふく

山にたぐ夕の山にたぐや

ゆふ八目くく一の声もいり二白の嫌

夕く

とほくさる酒百韻子一也  
此介も夕も一はくさる

須又ゆふさく一のまも一やすめ字も折え  
まもあ子不嫌うのさりはくま入るわ

夕

とまよあまなかのまに付て  
不昔打く一は也一打散を嫌

とは皆お類さる

夕

夕の字のなつる甲夕も字も五白  
さやあまやまも一も二白嫌

金井時命不嫌る

おのめ



ゆよりちのち

極み也  
字もむるさる

夕の字もかや書の字も二句此時より  
ともうら  
人よ尋侍にハ右のむるさる

夕

只一  
夕はむるさる  
夕はむるさる

夕

夕はむるさる  
夕はむるさる  
夕はむるさる

夕

夕

夕はむるさる  
夕はむるさる

夕

夕はむるさる  
夕はむるさる

夕

夕はむるさる  
夕はむるさる

夕

夕はむるさる  
夕はむるさる



るに替て用ゑ求室乃字にばあぬま書確留  
本の書為他多る者又曰又を字に如本武か  
考書お四以上新式の商也に被他多る者  
四也中比ぬ一の書にを極る極書るといへ  
える也にむろれゆるハ冬さまのかあるに  
推留止とやゆにぬるに極る者ハ又向とい  
え説不問之于一に極書為他多るハ又向とい  
るに替てまへとまの極書は申す  
再録也不問之只要とつていり極一に  
えけゆるおも冬もまの極書とまへて

四と又一わくの心ゆや書お傳ぬる一必又  
誤りるよよ申して破邪取正のためを  
大くけりぬおの書としへはハ白論月乃  
書おの書の類なり

よ一留止に付て又求室極や留本の  
書にむろる目おの儀を記ハ

よみろるにまをい何一も極

よあににたにににたににたに

あ

あ

あ



ゆゑ  
よふにむろと付る事不のあとも  
月も成る事へしとソフカ

雪の花  
柱物もあふい 月もあつてや

雪  
とまふまろまと付て又彼まると  
無一たへ回るい 嫌と連歌の大まると

雪  
六のをるとまると類嫌をわいらぬ  
善ふまるとめとへくま

弓の矢  
新まふおれと嫌ふし一のそ  
ことまるとまると張月と中み矢

赤眼此類此の替りたへに流るは矢二と嫌然  
せ新との替や弓張月と弓と又ま中の矢と  
矢との弓の替り本の弓矢とてくじけ矢ふ  
まのまるとまると祝ふ習ま 矢乃ことと  
月川弓とま類又あまるとまると流るは

ゆら  
地おふとことまれば 秋安ま

雪  
七向まや大らま 雪ハまるとまるとおや  
かゆねのまると元と中 聴やまると  
雪秋の極めまるとまると 春秋まるとまると 入てハまると



まゝに又極めとしくハれたまふさびり  
まゝにハあゝい

うらやまうはさく  
とくまゝに寝る宿水夜を

ゆめとまゝにうつとまゝにのこるハうけ  
みするひくいて寝るまゝにす他清く

うらやま  
もうはく寝ゆめさしるまゝに二の嫌  
園と福むる備とろむるまゝに二の嫌

おめ  
とまゝにまゝとおまゝと付て目を  
付るまゝにけおとまゝにをば不付さ

まゝにまゝ寝るまゝに寝るまゝに寝る  
新志の宿也

まゝの世乃  
類は寝るまゝに寝るまゝに寝る

まゝに寝るまゝに寝るまゝに寝る

ゆめく  
とまゝに寝るまゝに寝るまゝに寝る

り  
まゝに寝るまゝに寝るまゝに寝る

まゝに寝るまゝに寝るまゝに寝る











六月晦日よあふるや音の悪きおどろ  
成て人と知す成るへ驚きるや大い  
晦日子宮とつひにみたるつきの申の國  
より更なるわが望み何の恐れにほくも  
白紙ゆきてみんとやまじくはとよ  
安の晦日よあふるや音の悪きおどろ  
ゆきまじくはとよ

# 帝勅神子三木

傳へ字り  
不嫌は何も

二白輝とまわ

# 毒

子宮に毒をばす

# 毒

子宮に毒をばす

# みつ毒物

傳へ字不嫌と云  
毒物は二白と云

# 三毒

傳へ字り

あふるに二白の輝とまわ



みこけみりきりるる

代のみ後

みれはのな

治る

の鶴さし付るりるりはるり  
かゝはるりとまソソ

治階

禁中をも社殿もあちあちとよ  
皇居あゝ治事一切も此方に

治乃字のり

初と嫌とありおま  
みりりさとを替りてハ

も嫌やある統るおとあしよみりとも

も嫌とりの重て好士のの君さるる

るハお孔程を本とまへ一はあゆむ体は

宮

神祇も二皇みも二何もその内一つハ  
名にころへ一聖の宮おハ神祇もあ

宮さしは皇居さし

みやけりへる宮の字も嫌へし

宮城野

みやけハよ一禁る宮城野  
付るる嫌や目付るるあ



三日月にこり

部 大宮新と嫌と云り此はあり流り

部 只一名にり一糖子一とあり此儀は月へまとい

二又

部 ともむり一志望をさすと付て又あら

部 ともむり一志望をさすと付て又あら

部 ともむり一志望をさすと付て又あら

部 ともむり一志望をさすと付て又あら

三日月 の出るハ此儀をハおろし

三日月 の出るハ此儀をハおろし



出字 二也一々名にふるん一也

ふん

出字

ふん根朽と嫌是ハいつとの説也  
之福有る上幸山ありするも此嫌ハ治  
定也朽と嫌と云好立日おなくるも只も此  
嫌と云説然へくくん物嶽山の云さるもの  
子下又まよくあ載るもけ来決さるるハ  
書なほその流はを連やうてその道程至極と  
す不のる降後

ふん ぬん

みあけぬ浦さるる  
ぬんさるる

聴るわは此儀もるあゆむと

水

二也一ハ名にふる  
へ一水の字不嫌

け

二ハ可嫌

水鳥

ふと云字あけと水鳥一あり  
体用さかきり

水

ふみくさみうらいつまこと里み一好  
るといつともけ類也の嫌也















白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は

白木線 白木線は白木線は白木線は白木線は白木線は



指木ハ波ノ底ニ  
類ハ由ナク

フー~~~~~

走ル屋  
み~~~~~

走ル子  
~~~~~

走ル
~~~~~

ソ~~~~~  
~~~~~

走ル
~~~~~

あ~~~~~

走ル  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

走ル
~~~~~

~~~~~


思摺

此種和意の思ふと云字は折改
こゝろよまら

志のひ草

社るれ思の字は折と
そゝ事へ

志芝の車

此處將初来せぬ車
のりや此儀不審と

きんせられあふハあぬと云はる成へし

思ふ

ふ久乃しつ人子きつりてあふハ
おゝ渡びゆあふとつしり犬と

升類みれ向きや下書よ。あはれく

檜のるい

さととてと種物なり
新教也只檜ハ此新

教と云侍ハ下子不審と云はる是も新教歟

檜

ハも更らとぬ物なり。實ハ句論新也
檜葉も秋なり。

下草

志の蕨ると何も只ハ不審下
草のよしと云へし木この志の草

さあへしと云ふ也

志けみ

野ら出りしつりも云へて
こゝろよまら

禁とる

果敢れまゝ、種物りーあゝの

志なむ

種物りーあゝの道りー二の

志く

社冬各一つ渡の志くしさと

時雨

時雨字付てもあまの志くしと

時る

あゝはるちまはれど

嫌や志くしあちりま一はく目

下

あまの志くしあちりまあ嫌木こ

志の

嫌の類をよとよ嫌あゝの

志み

あゝの嫌あゝの嫌あゝの

二句はあちりま

あゝの

あゝの嫌あゝの嫌あゝの

子よりくま木

此種物にそま

多うたるへしとは極成子書るハ
おぼびかハ秋の中秋ハ冬もともゆん
うう人物う二白き〜ゆとりし説不謂
種抽子あ〜

子にそめ

む〜ゆまの内そくろ
み〜るまびりよきり

子

子にまの

神祇也にちろまハ神供也
をさ〜とあゆ〜とまま

君と長

ゆけまおし人とまま〜二白
〜〜〜ハ〜

他園

〜〜〜人とま字〜二白嫌〜あ
〜〜〜ハ〜

娘

ゆき娘ゆよにめさ〜し〜
おびか〜しにめ二あ〜

白子登

不嫌〜付〜も〜

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

支 月 日 一 支 一 支 一

離人形とてさるるのひささきよふ嫌と
とま然に不嫌とてさるる不嫌をいふ所の嫌と也

ひく
よちいよ一ちまひくと付るハ
悪一殺すよは類をいふ

いこおとろ
さると田と
拾てハ括お

二の嫌
嫌とけと括一をよ一也他清く

いぢり
善秋よの時命とむとさり
とけとらに

あ
あ
あ

あぢり
あぢり
あぢり

あぢり
あぢり

あぢり
あぢり

あぢり
あぢり

あぢり
あぢり

於て一ハ此かす内ハ天何れなるか
の多るハ國々然ハ是も亦以替へし

子葉の枝のる鶴の枝は二星の列
と措て其後を為し取ら

此の多の枝よせてりつとさわは儀不の用
古今を志す天何れ葉と枝は渡來ハや七夕
片め乃秋枝さうくとよあさうせ
又一と云ふとよ安ハ秋やうとさる此の
ハ此葉とけしにさしせえやとうたわたり
まう初さうとをまふとつけはくもの

此葉の枝と玉物のあさうによ安ハ此
枝は紅玉さうとりハ本文あけハ舟と
枝とも枝とへし枝は二ハの葉とさるは
能何れ事一物ハ枝はりハ不嫌

み葉の二ハ嫌ハさおのくみ言ハ
くまさは不の嫌ははあはむや

み葉とあちてさうおらハ木の葉一葉
さうとさうとさう

みちの山はいろさと同形とハ嫌
とさうは山のいろ葉のいろ

草のいろはも成るへぬしきり
みぢふよこののえに白燐やこはと
葉ハ五の種はふまのはくまの草の
本林 六一名にりーたるへー又云道成
たぐすい海ー

景の山川 一のちれハく
乃ほるとまへりる
の空は

まーち 茶 植物やま露のるよしの
るーらんハ植物

まーち 草の二白の種とある植物
まの終ハ白論物列の植物

百の草 草の百千の種とある
草の百千の種とある
無限とまのほうくはとる海ー

船のまへへ 船物や船名
おまへへ おまへへ

武士 武士

もの もの

無一回にも

もみ もみ

は は

もみ もみ

もの もの

もの もの

物 物

雨 雨

船物や船名
おまへへ
武士
もの
無一回にも
もみ
は
もみ
もの
もの
もの
物
雨

三つ一 向あつるをあも不嫌詞の字と
新式にあつるにあらぬのよを各
お乃ちや不嫌詞にあらぬにあらぬ
急の三葉あつるはははる及びあ嫌詞へ何と
川も一各別一にあらぬ不嫌詞を清く
物な

又字あもあつるにあらぬ
たつるにあらぬ

類ハいふたつあつるにあらぬ
又字

あつるにあらぬ
あつるにあらぬ
あつるにあらぬ
あつるにあらぬ

開 只一名に一毫一さき秋とししと

開 きて一毫又さき秋さしとのるよの秋は

開 新式の相を以て後六開一名にり一

開 屋開の穴 北極のこ極るとあ

開 の字 ぬせ兼水びとを若子嫌や開

二のりいあさち

武 武 ぬまよあめの開と付て又さ

迫 責 ころを字も各別するあ不の

の流し

蟬 只一日喚と新と嫌や聲もさう急

とゆるとソクカ

とん とり初とさるとさとはさあ

あ二句さしあ他清え

す

伯耆の神 女にさやふ

名にうあひひあふまはく

駿河乃海 國の文二の嫌

ゆんりなふりい三白ふふあふ

乃海伊路のうみさといつし

二

末の松 女に松の松と云し山類也

松 女に松の松と云し山類也

松 女に松の松と云し山類也

松 女に松の松と云し山類也

松 女に松の松と云し山類也

松 女に松の松と云し山類也

下書きの字

世の字 人の字世の字さの字

世の字

世の字 世の字さの字

世の字 世の字さの字

世の字 世の字さの字

下書き

世の字 世の字さの字

世の字 世の字さの字

世の字 世の字さの字

世の字 世の字さの字

世の字 世の字さの字

